

マルコによる福音書7章6－8節 「神の戒めと人の教え」

1A 人を自由にする神の命令

1B 命令に違反する罪

2B 罪の奴隷

3B キリストによる解放

4B 神に仕える霊

2A 心に対する戒め

1B 八つの幸い

2B 御霊による新生と清め

3B 愛による戒め

3A 人の言い伝え

1B 肉の誇り

2B ないがしろにされる心

3B 交わりの疎外

4A みことばと信仰によるきよめ

本文

マルコによる福音書 7 章を開いてください。午後に 7 章全体を見ていきたいと思いますが、今朝は 7 章 6-8 節に注目します。「6 イエスは彼らに言われた。「イザヤは、あなたがた偽善者について見事に預言し、こう書いています。『この民は口先でわたしを敬うが、その心はわたしから遠く離れている。7 彼らがわたしを礼拝しても、むなしい。人間の命令を、教えとして教えるのだから。』8 あなたがたは神の戒めを捨てて、人間の言い伝えを堅く守っているのです。」

今、エルサレムから宗教指導者たちが来ています。パリサイ派の人たちが律法学者と共に来て、そして、弟子たちが汚(けが)れた手で、水洗いをしていない手でパンを食べていることを責めました。これは、衛生上、手洗いをしていないから汚(よご)れているということではなくて、儀式上、汚れているということです。聖書には、水洗いをするについての命令が律法の中にありましたが、けれども、食前に手を洗うということは書かれていません。これは、長年のことユダヤ人の中に語りつがれてきたしきたりであります。

これは異邦人と区別するためであります。市場に行けば、異邦人も混じってそこで売り買いしています。あるいはユダヤ人だけでも、使っている貨幣は異邦人も使用したものかもしれません。そうすると、異邦人は神によって汚れているとされる動物を食べていますから、その汚れが自分にも移ってしまいます。それで、食べるものを、気を付けるだけでなく、その手に汚れがあるかもしれ

ないので、入念に清めるのです。それで衛生的に効果があるということではなく、あくまでも、それらのしきたりによって、自分が神から受け入れられ、ユダヤの民として連なっていることを確認していました。

そのことを見て、イエス様はイザヤの預言を引き合いに出し、口先で神を敬っているが、心は遠く神から離れている。そして、神の戒めを捨てて、人の言い伝えを堅く守っている、と言っています。

私たちは、日本人として、神道や仏教の儀式やしきたりがあるので、それを思い出せば身近なことではないでしょうか？それを行うのに意味があるのか？と聞かれたら、ほとんど多くの方が答えられません。けれども、それを行わなければバチが当たるかもしれないし、何よりも親戚や近い人たちから非難を受けるかもしれないという恐れがあります。それで守っているのですが、状況は似ているかもしれません。人の教えは守っていますが、いかがでしょうか？人の心は置き去りにされて、ただしきたりだけが続くということは、仏式の葬儀に限らず、いろんな場面で見ることが出来ると思います。似たようなことが、いいえ、もっと厳しいしきたりなので、それ以上のことが、今、イエス様の弟子たちに向けて行なわれていると想像すると宜しいかと思います。

1A 人を自由にする神の命令

そこで、人の教えであるしきたりと、神の命令である律法を比べてみたいと思います。

1B 命令に違反する罪

聖書の中で、またキリスト教で「罪」と呼ばれているものは、神の命令に違反することです。神はアダムに、「創世 2:17 善悪の知識の木からは、食べてはならない。その木から食べるとき、あなたは必ず死ぬ。」と言われましたが、アダムは妻から与えられた、その善悪の知識の木からの実を取って食べました。

2B 罪の奴隷

そのことによって、罪が人々の中に入りました。「ロマ 5:12 ちょうど一人の人によって罪が世界に入り、罪によって死が入り、こうして、すべての人が罪を犯したので、死がすべての人に広がった」とあるとおりです。人にとって罪は、息を吸うようなものになってしまいました。遺伝子のように、自分の核のところに、言い逆らう心が出来てしまいました。

私のことを思い出すと、恥ずかしい限りです。自分が何をもって生きて行けばよいか分からなかったのですが、高校生の時は有名大学に入ればよいのだという思いがありました。けれども、それでは満足しないことを知りながらやっていました。そして大学に入ると、サークルで燃えました。ところが、仲間がとても嫌がったのです。自分のしていることが、いかにパートナーを無視したものであるかを指摘されました。それで落ち込んだのですが、彼に対して謝りたいというよりも、自分がこ

れまで努力してきたのに、全くむなしいばかりか、他人に迷惑までかけていることをしり、愕然としたのです。そこで思い出したのです、自分がもし神によって造られているとしたら、その神をあがめて生きてきたのか？いいや、一度も神のことなど考えたこともなかった。だから、自分のことも分からなくなっていたし、自分が分からないのだからましてや、他者のことも分かりません。

罪というのは、自分で悪いと知りながら行っていることもあります。むしろ良かれと思ってやっているのに、空振りしているところによく表れます。それほど、自分を狂わせているものです。自分ではどうしようもない、がんじがらめにしているものです。

3B キリストによる解放

しかし、キリストが来て、解放してくださいました。この方がその罪を取り除くために、この世に来てくださいました。そして、ローマの十字架に磔にされたのですが、そこで実は、神が私の罪を、みなさんの罪を身代わりに受けてくださり、そして死んでくださったのです。それから神が三日目によりみがえらせて、それでこの方を自分の心に救い主として受け入れることによって、罪からの解放を行ってくださいました。

4B 神に仕える霊

それで主は、私たちの新しい霊を与えられます。人には、体と魂だけでなく、神とのつながりを持つ霊が与えられています。その霊において、神に仕えることができるようにしてくださいました。神の命令に従うことができるようにくださったのです。「ロマ 6:17 神に感謝します。あなたがたは、かつては罪の奴隷でしたが、伝えられた教えの規範に心から服従し、罪から解放されて、義の奴隷となりました。」神の教えの規範に心から服従することができるようになり、それで罪から解放されています。

神の戒めは、人を束縛しません。その反対で、人をその内にある罪から、そのどうしようもないがんじがらめになっているところから自由にするものです。「ヤコ 1:25 自由をもたらす完全な律法を一心に見つめて、それから離れない人は、すぐに忘れる聞き手にはならず、実際に行う人になります。」そして、ヨハネ第一には、「5:3 神の命令は重荷とはなりません。」とあるのです。

2A 心に対する戒め

1B 八つの幸い

そもそも、主が人に命じておられる戒めは、その人の姿勢、心に対して語りかけておられるものです。手を洗ったであるとか、その物理的に洗ったことによって清められるというのではなく、神の命令を心から聞き、神を信頼して従うところに、清めが起こっています。神と、心と心を交わしていくことによって、主の言われていることに従います。

イエス様が、山上の説教を行われた時に、何を取り扱われたかを思い出してください。手をきれいにするのではなく、心を貧しくすることでした。「マタ 4:3-5 心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです。悲しむ者は幸いです。その人たちは慰められるからです。柔和な者は幸いです。その人たちは地を受け継ぐからです。」神に対する心の態度から始まりました。そしてご自身は、律法を破棄するために来たのではなく、成就するために来たのです、と言われました(マタ5:17)。その内容は、「殺してはならない」という戒めに対して、兄弟に馬鹿と言ったら、神の審判で裁かれるというものでした。殺すという行為の前に、あの人がいなくなってくればいいのに、という思いそのものが、その人を殺すことにつながるのです。戒めは心の奥底まで探る鏡となっているということです。

2B 御霊による新生と清め

そこで、神は心と霊においてご自身に従わせるために、ご自身の霊によって人を新しく生まれさせ、また清めることを行なわれました。「テト 3:5 神は、私たちが行った義のわざによってではなく、ご自分のあわれみによって、聖霊による再生と刷新の洗いをもって、私たちを救って下さいました。」パウロは、いろいろな悪習慣を持っていたコリントの人たちに対して、こう話しています。「I コリ 6:9-11 あなたがたは知らないのですか。正しくない者は神の国を相続できません。思い違いをしてはいけません。淫らな行いをする者、偶像を拝む者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者、盗む者、貪欲な者、酒におぼれる者、そしる者、奪い取る者はみな、神の国を相続することができません。あなたがたのうちのある人たちは、以前はそのような者でした。しかし、主イエス・キリストの御名と私たちの神の御霊によって、あなたがたは洗われ、聖なる者とされ、義と認められたのです。」偶像を拝んだり、淫らなことをしたり、貪欲で盗みもしたりしていた者たちが、それを更生するプログラムを受けたのではなく、主イエス・キリストの御名と神の御霊によって、洗われ、聖なる者とされ、それで義と認められたのです。

3B 愛による戒め

ですから、私たちが神の戒めを守る時は、それは新しくされた心と霊が、神に従いたいと願わせるからです。神を愛したい、キリストに従いたいと願うからです。神の命令を守るのが、もはや、なにかばちが当たるから、ではなく、愛しているイエス様を傷つけてしまうから、あるいは喜ばれたいからという動機で、それで戒めを守ります。「ヨハ 14:15 もしわたしを愛しているなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです。」とイエス様は言われました。なぜ神を愛しているのか？と言えば、神に愛されているからです。イエス様が愛してくださっているということを知っているからです。それでイエス様を愛したいと願って、それで言われたことを守ります。

こんな話を聞いたことがあります。北朝鮮から脱出した小さな子がいました。そして韓国の人がある子をお子として育てました。けれども、その学力が年齢よりも二年ぐらい遅いのです。どんなに頑張って教えても、全く覚えることができませんでした。ところがある時に、ふっと変わりました。

一気に、教えられたことを覚えることができるようになったのです。学力が年齢にふさわしいぐらいに追いつきました。それは、その新しい親を親なのだということを認識できるようになったからではないか？ということです。自分が愛されているということが分かったから、やらなければいけないことが、やることができるようになったということです。

3A 人の言い伝え

1B 肉の誇り

では、人の言い伝えや、人の教えを守っていくのには、どういった動機が働いているのでしょうか？ユダヤ人たちが、手を洗うことによって自らを清める儀式を行うようになっていったのは、初めは純粹だったかもしれません。神だけのものになりたい、聖められたいという動機が働いていたことでしょう。エズラ記やネヘミヤ記を見ますと、自分たちが異邦人と交わっていたから、それで偶像を拝むようになり、バビロンに捕え移されたのだという深い悔恨があります。それで、異邦人と婚姻している者たちが実は多くなっているという事実には驚愕して、主に悔い改めの祈りを捧げました。

自分を聖く保っておくということは、しかし、神の霊によって自分の霊が守られて、一步一步、主に祈りながら、主に拠り頼んで、それで保たれていくものです。異邦人との関わりと言っても、自分たちがこの世界から離脱しないかぎり、非ユダヤ人と共に暮らしている訳であり、免れることはもちろんできません。けれども、もし「これさえやっておけば、聖く保っていることができる」というものさえ作れば、それを守っていれば自分が聖いと証明できるのです。つまり、神に拠り頼まなくてもよい、代わりのシステムを作ってしまったのです。ひたすら、自分の体の中に入るものを気をつけて、手を洗うことによって汚れが入って来ないようにする、というもの。その他、異邦人の家に行くことはご法度だし、もっともしてはいけないのは食事を共にすることです。当時は、パンは同じパンを裂いて食べていましたから、同じものが腹の中に入るという事で、異邦人と一つになってしまうわけです。

神の命令ではなく、人の教えを教えとして守っていると、人をがんじがらめにしていきます。けれども、それ以上に自分自身の心が砕かれずに、心に誇りを持ったままで、いや心を高ぶらせるためにも守ることができるからです。心が変えられないまま、神の戒めは守ることは決してできません。人はそれだけ墮落しているのです。けれども、それでも守られるというのは、守ることができるようにハードルを下げている、基準を下げて二しか過ぎません。そして、守っているように見えます。肉は誇ったままです。けれども、神の命令にこそ自由があるのに、それをしないので、人に重荷を負わせるだけになります。

2B ないがしろにされる心

その間に、人の心はないがしろにされます。イエス様は、そのことを災いだとして、このように糾弾されました。「マタ 23:25-28 わざわいだ、偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは杯や皿

の外側はきよめるが、内側は強欲と放縦で満ちている。目の見えないパリサイ人。まず、杯の内側をきよめよ。そうすれば外側もきよくなる。わざわざ、偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは白く塗った墓のようなものだ。外側は美しく見えても、内側は死人の骨やあらゆる汚れでいっぱいだ。同じように、おまえたちも外側は人に正しく見えても、内側は偽善と不法でいっぱいだ。」外側を清めているように見えて、人には良く見せているかもしれませんが、実は心が偽善と不法でいっぱいなのです。強欲と放縦で満ちています。

イエス様が集まって来ていたユダヤ人たちに、みことばを教えて、それを信じた人たちがいました。それでイエス様は、「わたしのことばにとどまるなら、あなたがたは自由になれます。」と言われました。ところがユダヤ人たちは、「私たちは誰の奴隷になったこともありません。」と言いました。けれどもイエス様は、「罪から自由にされている者が、本当に自由なのだ。」ということを言われました。それなのに、彼らは自分たちが初めから自由で、初めから救われていると思っていたので、反発していたのです。ユダヤ人たちは、「私たちはアブラハムの子孫だ。私たちは淫らな行いによって生まれた者ではない。」とまで言いました。そう、イエス様が、マリアがヨセフではない男と淫らな行いをしたから生まれたのだという噂をそのまま話したのです。話がどんどん、えぐくなっていきました。そして、「私たちの父は、神です。」と彼らは答えます。それでイエス様は、はっきり言われました。「ヨハ 8:44 あなたがたは、悪魔である父から出た者であって、あなたがたの父の欲望を成し遂げたいと思っています。悪魔は初めから人殺しで、真理に立っていません。」

そうです、自分自身はアブラハムの子孫だと言ったり、私たちの父は神だと言っていましたが、イエスを殺したいという殺意は、まるで無視されていたのです。その殺したいという思いがまったく放置されており、その思いは悪魔から来ているということで、イエス様は悪魔の子だと言われたのです。このようにして、人間は心を放置して、自分の正しく見せようとしてしまうのです。

3B 交わりの疎外

このように、神の戒めではなく、人の言い伝えを教えとして受け入れていると、それを守っている人とそうでない人との間に隔ての壁を作ってしまう。ユダヤ人と異邦人の間には隔ての壁が造られていましたが、ユダヤ人の間でさえ、取税人や遊女は律法を守ることさえ期待されていませんでした。そういった表だけの正しさは、壁を互いの間に造り、交わることができなくさせます。

4A みことばと信仰によるきよめ

しかしイエス様は、それを崩すために来られました。人のしきたりではなく、外の行いではなく、心が、みことばを信じて聞くことによって清められるようにしてくださったのです。そうすれば、食物規定を守るユダヤ人と、そうではない異邦人の間には差別がなく、互いに交わることができます。

その良き例が、百人隊長コルネリウスの回心です。彼は異邦人でしたが、神を恐れていました。そして、ペテロを連れて来なさいという啓示を受けます。それで、使いをよこしますが、ヨツファにいたペテロはペテロで、幻を見ていました。天から風呂敷が降りて来て、そこには汚れているとされる動物があり、「ほふって食べなさい」という声だったのです。ペテロは、「主よ、それはできません。」と答えました。自分はそういった汚れたものを幼いころから食べたことがないと答えたのです。けれども、その幻が三回あったのです。その時に、コルネリウスからの使いが来たのです。そしてペテロは、他のユダヤ人信者と共に、カイサリアにあるコルネリウスの家に来ました。

その時は緊張したことでしょう。異邦人の家の中に入って行ったのですから。その敷居を勇気をふりしぼって入りました。そして、そこでコルネリウスの家族もおり、みながペテロの語る福音の言葉を聞いていました。すると彼らに聖霊が下ったのです。異言を語り、神を賛美したのです。それで、ペテロは悟りました。後で話しますが、「使徒 15:9 私たちと彼らの間に差別もつけず、彼らの心を信仰によってきよめてくださったのです。」信仰によって、清めてくださったのです。ここには、全く差別がありません。聞いている言葉を、それを信仰をもって聞いているのか、そうでないのか？の違いなのです。

私たちが、真剣にみことばに聞き、それを信じて、心が清められたいです。その中で、生きた神との交わりがあり、そして互いの交わりがあります。心からキリストにあってつながることができます。それが平和のきずなであり、もし私たちが漫然と、教会は行くところだから来ましたということであれば、必ずや教会は義務的なものとなり、喜びや楽しみはなくなり、窮屈になってきます。人の言われていることをただ行っているのであれば、口先では神をうやまいながら、心が離れているのです。しかし、へりくだりの心で、自分が主に語られたらそこで悔い改めるといふ思いをもって聞いて行けば、主は必ず心を変えて、生きた交わりを、聖霊に満たされて、平和を造る人になることができます。